



室蘭工業大学

学術資源アーカイブ

Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive



スペイン語とイタリア語における定冠詞の分布について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 北海道言語研究会 公開日: 2018-01-19 キーワード (Ja): キーワード (En): definite article, Spanish, Italian 作成者: 藤田, 健 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/00009522

スペイン語とイタリア語における 定冠詞の分布について

藤田 健

Distribution of the Definite Articles in Spanish and Italian

Takeshi FUJITA

要旨 : The definite article occupies the primary position in the article system in Spanish and in Italian. We examine the syntactic distribution of the definite article in a corpus (a Spanish text and its Italian translation, and an Italian text and its Spanish translation), taking into account the distributional correspondence between the definite article and other determiners, the null article included. We conclude that the definite article has a close connection with the null article in both languages, though the null article in Spanish is used more widely. It is also shown that the Italian definite article assumes a part of the functions of the possessive adjectives in Spanish. This fact is attributed to the syntactic status of the possessive adjectives in Italian.

キーワード : definite article, Spanish, Italian

0. 序論

冠詞という文法カテゴリーを有する言語において、この要素は名詞句において極めて重要な文法的役割を果たす。ロマンス諸語は、冠詞を有する言語が多いことで知られるインド・ヨーロッパ語族の中でも、特に冠詞体系が発達している言語群であると言える。しかし、個々の冠詞の機能についてはグループ内で差異が観察される場合がある。スペイン語とイタリア語は、ロマンス諸語の中で文法的な観点からは中間的な位置を占めている言語であると言え、特にイタリア語はその点で顕著である。冠詞に関する研究は、それぞれの言語において様々な観点から進められているが、言語間の対照的視点からの研究はあまり進んでいないのが現状である。

冠詞の中でも、定冠詞は多くの機能を有し、最も使用頻度が高い要素である。定冠詞の機能を考察する上では、定の決定詞としての位置づけが極めて重要である。定の決定詞全体の中で定冠詞の分布・機能を考察することによって、はじめて明らかになる本質が存在する。本稿では、スペイン語とイタリア語の定冠詞の機能を対照的に考察

すべく、その分布を詳細に検討し、指示形容詞や所有形容詞といった他の定の決定詞との対応に焦点をあてて分析を進めていく。特に、従来の研究ではあまり関連付けて考察されなかったゼロ冠詞を中心に据え、定冠詞との関係を考察する。これにより、定冠詞・不定冠詞・部分冠詞という冠詞体系内のみでの考察ではとらえられない定冠詞の特質を明らかにしたい¹。

1. 両言語における定冠詞の位置づけ

ここでは、スペイン語とイタリア語の定冠詞が従来どのような形で分析され、どのように位置づけられてきたかを見るために、先行研究を概観する。

1.1. スペイン語

スペイン語は、二つのカテゴリーからなる冠詞体系をもつと考えられている。すなわち、定冠詞と不定冠詞であり、イタリア語やフランス語に見られるような部分冠詞というカテゴリーが設定されることはない²。それは、物質名詞や抽象名詞の不定量を冠詞として標示する要素が存在しないからである。

Hernández Alonso(1984)は、定冠詞は依存的で強勢を持たず、語源であるラテン語の指示詞から継承した直示的機能を持つ記号であると定義し、それ自体の意味内容を欠き、一般的な性質を持つ指示子(indicador)であると主張する(p.569)。Leonetti(1999)は、定冠詞を定義づける上で重要な二つの素性として、既知の情報(información consabida o conocida)と唯一性(unicidad)をあげている(pp.791-792)。ここで唯一性とは、文脈において関与する唯一の実体を示すことを意味している。定冠詞の機能は、Satorre Grau(2000)によると、聞き手(oyente)が話し手(hablante)と共有している、あるいは既に提示されていることによって、その指示対象を知っている名詞句を現働化する(actualizar)³ことである。指示詞や所有詞と同様に、直示的(deíctico)で基本的に指示的(referencial)な要素であり、同定的(identificador)な機能を有する(p.282)。以下の例では、不定冠詞によって導入された初出の名詞句を、定冠詞で再提示している。

- (1) Ayer compré un libro. El libro tenía dentro una hoja de papel. En la hoja
yesterday I bought a book the book had inside a piece of paper in the piece
estaba escrito un mensaje.
was written a message

“昨日一冊の本を買った。その本の中には一枚の紙切れが入っていた。その紙切れにはメッセージが書かれてあった。”

¹ 本研究は、平成28年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)(課題番号15K02465)による研究成果の一部である。本稿の執筆にあたり、査読者から大変有益なコメントや誤り・不適切な表現の指摘を数多くいただいた。ここに深く謝意を表するものである。

² Hernández Alonso(1984)やLópez García(1998)は、冠詞というカテゴリーに含まれるのはいわゆる定冠詞のみで、不定冠詞は不定の数量詞として位置付けている。このような見方はスペイン語学の領域においては一定の位置を占めているものではあるが、本稿では通言語学的な視点に立ち、冠詞は定冠詞と不定冠詞からなるという一般的な立場をとる。

³ ここでの現働化という用語は、具体的な事物を指示する機能を付与することを意味している。現働化が行われない場合、名詞句は抽象的な概念・類を意味することになる。

また、定冠詞の大きな特徴として一般化(*generalizador*)の機能があり、名詞句によって指示される種(*especie*)を集合全体として指示することによって総称的(*genérico*)な意味をもつ(p.284)。

(2) La naranja es una fruta.

the orange is a fruit “オレンジは果物である。”

Leonetti は定冠詞の機能を、照応的用法、直示的用法、連想的照応用法、様々な種類の知識に基づいた非照応的用法、修飾要素の存在に基づいた非照応的用法の五つに分類する。

Matte Bon(1995)は、定冠詞を含む冠詞は演算子(*operador*)であるとし、定冠詞は 1)発話者が名詞句に関して抽象的な性質のみならず、具体的な実体を問題にしていることを示す、2)既に先行文脈において現れた名詞を指示することから前提を構成する、という二重の機能を有するとする(p.216)。これに対して、López García(1998)は数詞や不定の決定詞を伴う数量表現(*expresiones cuantificadas*)は演算子によって束縛される変項(*variables*)であるのに対し、定冠詞・指示詞・所有詞を伴う名詞句は定項(*constantes*)であるととらえている(p.283)。また、Salvá(1988)は、スペイン語において定冠詞は 3 人称人称代名詞と遠称の指示形容詞 *aquel* と極めて密接な関係を保っていると述べる(p.353)。

1.2. イタリア語

イタリア語は、三つのカテゴリーからなる冠詞体系をもつと考えられている。すなわち、定冠詞・不定冠詞・部分冠詞である。この点で、フランス語と共通している⁴。

Andorno(1999)によると、定冠詞は、話者と聞き手(*ascoltatore*)が知っている、あるいは同定可能(*identificabile*)であると話者(*parlante*)が認識している、定の指示を持つ名詞に伴う(p.35)。既知、もしくは同定可能である理由としては、本質的(*intrinseco*)なもの、テキストによるもの、語用論的なものがあげられている。

(3) Ho comprato una gonna e una giacca. La giacca mi va stretta.

I bought a skirt and a jacket the jacket me goes tight

“私はスカートと上着を買った。その上着は私にはきゅうくつだ。”

またこれとは別に、個体ではなく、クラス全体を指示する名詞にも伴う(p.36)。Sensini(1997: p.69)や Dardano and Trifone(1997: p.150)が述べているように、これは物質や抽象的概念の場合にも適用できる。

(4) a. I ragazzi devono praticare qualche sport.

the boys should practice some sport “少年は何かスポーツをするべきだ。”

b. Il petrolio non è inesauribile.

the petroleum not is inexhaustible “石油は無尽蔵ではない。”

c. La pazienza è una gran virtù.

the patience is a great virtue “忍耐は大いなる美德である。”

⁴ ただし、個々の機能については一定の相違点が観察される。詳しくは、Fujita(2013)、藤田(2013)、藤田(2016)を参照されたい。

Sensini は、未知のものであっても指示対象を特定化する機能を持つ表現を伴う場合に定冠詞が用いられる用法や、特定の文脈において指示形容詞・指示代名詞・配分の意味をもつ不定形容詞・時の限定要素としての機能についても言及している(p.69)。

- (5) a. Il centro di Milano è sempre molto affollato.
 the center of Milan is always very crowded
 “ミラノの中心部はいつも込み合っている。”
- b. Entro la settimana sapremo i risultati delle analisi.
 within the week we will know the results of the analyses
 “今週のうちに我々は分析結果を知ることになる。”
- c. Dei due fratelli preferisco il più giovane.
 of the two brothers I prefer the younger
 “二人の兄弟のうち、私は弟の方が好きだ。”
- d. Il lunedì pomeriggio vado in piscina.
 the Monday afternoon I go to pool “毎週月曜日の午後私はプールに行く。”
- e. Il mese scorso sono stato a Londra.
 the month last I was in London “先月私はロンドンにいた。”

Renzi et al.(2001)は、これらに加えて所有物を示す定冠詞の機能を指摘している(p.400)。これは譲渡不可能所有でも譲渡可能所有でもありうる。前者の場合は所有形容詞との交替は不可能であるのに対し、後者では可能である。

- (6) a. Mi fa male la testa.
 me makes pain the head “私は頭が痛い。”
- b. Abbiamo perso le valigie.
 we have lost the suitcases “私たちはスーツケースを失くした。”
- (7) a. *Mi fa male la mia testa.
 me makes pain my head
- b. Abbiamo perso le nostre valigie.
 we have lost our suitcases

以上から、説明の表現方法に違いは見られるものの、スペイン語とイタリア語の定冠詞の機能は基本的に共通していると言える。

2 . スペイン語の定冠詞のイタリア語における対応表現

本稿では、文学作品の原典とその翻訳を用いて両言語の定冠詞の分布を観察する。分析資料として用いるのは、スペイン人作家アルトゥーロ・ペレス・レベルテ(Arturo Pérez-Reverte)作の「アラトリステ(El Capitán Alatriste)」の一部とそのイタリア語訳(Roberta Bovaia 訳)及びイタリア人作家イタロ・カルヴィーノ(Italo Calvino)作の「木のぼり男爵(Il barone rampante)」の一部とそのスペイン語訳(Esther Benítez 訳)である。

本節では、スペイン語の定冠詞がイタリア語においてどのような形式で対応しているかを観察する⁵。結果は以下のとおりである⁶。

スペイン語テキストにおける定冠詞のイタリア語における対応

イタリア語においても定冠詞で現われているもの	3771(91.9%)
イタリア語において指示形容詞で現われているもの	32(0.8%)
イタリア語において所有形容詞で現われているもの	21(0.5%)
イタリア語においてゼロ冠詞で現われているもの	240(5.9%)
イタリア語において不定冠詞で現われているもの	19(0.5%)
イタリア語において上記以外の表現で現われているもの	19(0.5%)
総数	4102

これを、異なる形式で現われているものだけに注目して分布を比較すると、以下のようになる。

イタリア語において指示形容詞で現われているもの	32(9.7%)
イタリア語において所有形容詞で現われているもの	21(6.3%)
イタリア語においてゼロ冠詞で現われているもの	240(72.5%)
イタリア語において不定冠詞で現われているもの	19(5.7%)
イタリア語において上記以外の表現で現われているもの	19(5.7%)
総数	331

ここで注目すべきは、ゼロ冠詞が対応する例の比率のみが高く、その他の要素が対応している比率が極めて低いという点である。ゼロ冠詞は定性という観点からは不定と位置付けられるもので、定である定冠詞とは対立する要素であるとみなすことができる。それにもかかわらず対応例が多いという事実は、定冠詞とゼロ冠詞について何らかの考察が必要となることを示唆している。この点については、5節で論じることとする。

指示形容詞が対応する例の割合が低いという点も興味深いものである。指示形容詞は、定性という観点からは定冠詞と同じく定と位置付けられる要素である。定冠詞と共通する性質を有することから、一定数の対応が見られることも予想されるが、実際には全体の0.8%と低い比率でしか現れない。これは、スペイン語の定冠詞とイタリア語の指示形容詞の間で、機能の共通性よりも相違点が際立っているためであると考えられる。この点について論じるには、イタリア語の定冠詞とスペイン語の指示形容詞の対応についても考慮に入れなければならないため、次節で論じることとする。

また、不定冠詞への対応は全体の0.5%となっている。定性に関して定冠詞と対立する要素であることから当然低いことが予想されるが、この結果はその予想が妥当であ

⁵ 本稿では、言語間の対応を見るために、一方のテキストにおいて生起する定冠詞を含む名詞句に、もう一方のテキストにおいて対応表現が見られない例は集計に含めていない。従って、テキストにおける定冠詞の実際の生起数は対応例の生起数より多い。

⁶ 表中の百分率は、小数点以下第2位を四捨五入した数値である。従って、百分率の合計が100%にならない場合もある。

ることを示している。

その他の対応についても、いずれも低い比率でしか見られない。所有形容詞についても対応例が少ないという事実は、スペイン語の定冠詞とイタリア語の所有形容詞との間に機能的共通性が少ないことを示していると言える。所有形容詞は名詞が指示する対象の所有者を示す要素であり、論理的には定性に関して定・不定の両方がありうる。イタリア語では基本的に所有形容詞が冠詞もしくは指示形容詞と共起し、定・不定のいずれにも対応し得る。

- (8) a. la tua casa b. un suo amico c. quel vostro errore
 the your house a his/her friend that your error
 “私の家” “彼/彼女の友達” “あの君たちの誤り”

定冠詞・指示形容詞と共起する例は定、不定冠詞と共起する例は不定と考えられる。このことから、イタリア語の所有形容詞はスペイン語の定冠詞と定性に関して同じクラスに位置づけることができない。そもそも所有形容詞は、所有者を示すという機能がその本質的特徴であるのに対して、定冠詞は要素固有の意味機能という点では希薄な要素であるため、人称という独自の意味を持つ所有形容詞とは区別されて当然である。スペイン語の定冠詞には所有者を指示する機能が限られているために、イタリア語の所有形容詞との対応が少ないと考えることができる^{7,8}。

3. イタリア語の定冠詞のスペイン語における対応表現

本節では、イタリア語の定冠詞がスペイン語においてどのような形式で対応しているかを観察する。結果は以下のとおりである。

イタリア語テキストにおける定冠詞のスペイン語における対応

スペイン語においても定冠詞で現われているもの	3771(86.4%)
スペイン語において指示形容詞で現われているもの	39(0.9%)
スペイン語において所有形容詞で現われているもの	116(2.7%)
スペイン語においてゼロ冠詞で現われているもの	377(8.6%)
スペイン語において不定冠詞で現われているもの	32(0.7%)
スペイン語において上記以外の表現で現われているもの	32(0.7%)
総数	4367

これを、異なる形式で現われているもののみに注目して分布を比較すると、以下のよ

⁷ スペイン語の定冠詞にも、所有形容詞と共通する機能をもつと考えられる例が存在する。

Me lavo la cara.
 (I) myself wash the face “私は顔を洗う。”

譲渡不可能な名詞句に定冠詞が添えられた場合、文の中に生起する要素が所有者として解釈される。このような機能は、1.2 で述べたようにイタリア語の定冠詞も共有することから、スペイン語とイタリア語の両言語において定冠詞が用いられることになる。

⁸ イタリア語の定冠詞とスペイン語の所有形容詞の対応の場合には異なる傾向が観察される。これについては4節で考察する。

うになる。

スペイン語において指示形容詞で現われているもの	39(6.5%)
スペイン語において所有形容詞で現われているもの	116(19.5%)
スペイン語においてゼロ冠詞で現われているもの	377(63.3%)
スペイン語において不定冠詞で現われているもの	32(5.4%)
スペイン語において上記以外の表現で現われているもの	32(5.4%)
総数	596

スペイン語の定冠詞とイタリア語の対応表現の場合と比較すると、指示形容詞・不定冠詞の対応例の比率が極めて低い点が共通している。ゼロ冠詞の対応例の比率が高い点も共通しているが、比率を比較するとイタリア語におけるゼロ冠詞の対応が全体の5.9%であるのに対して、スペイン語におけるゼロ冠詞の対応は8.6%とより高い数値を示している。

これに対して異なっているのは、スペイン語における所有形容詞の対応例の比率が高い点である。ゼロ冠詞・所有形容詞の対応については、詳細に検討する必要があるので4節で取り扱うこととし、ここでは前章で言及した定冠詞と指示形容詞の対応について考察したい。

2節で述べたように、スペイン語の定冠詞がイタリア語の指示形容詞に対応している例は、全体の0.8%と低い比率となっている。この傾向は、上の表に見られるように、イタリア語の定冠詞がスペイン語の指示形容詞に対応している例の場合にも同様である(0.9%)。以下にそれぞれの言語において指示形容詞が対応している例を示す⁹。

i. スペイン語の定冠詞がイタリア語の指示形容詞に対応している例

(9) a. ¿Dónde se ha metido la curruca de las polainas?

where has got the stonechat of the leggings (スペイン語 BR p.49)

b. Dov'è finito quel saltimpalo con le ghettoni?

where has got that stonechat with the leggings (イタリア語 BR p.40)

“あのゲートルをつけたつばめ小僧はどこへ行った?”

ii. イタリア語の定冠詞がスペイン語の指示形容詞に対応している例

(10) a. Il più giovane lo guardò un po', riflettendo, mentre gli traducevano la risposta.

the younger him watched a little reflecting while him interpreted the response (イタリア語 AL p.92)

b. El más joven lo miró un rato, reflexivo, mientras le traducían aquella respuesta.

the younger him watched a little reflective while him interpreted that response (スペイン語 AL p.120)

⁹ 例文には出典とページ数を示しており、ALと記されているのは「アラトリステ」、BRは「木のぼり男爵」から収集したものであることを示す。

“その言葉を通訳してもらっている間、若い方の男は考え込むようにして彼を見つめていた。”

定冠詞と指示形容詞は、定性という観点からは定という性質を共有しているが、定性以外の点で両者の機能が明確に区分され、その区分が両言語において共通しているためにこのような傾向が見られると考えられる。Leeman(2004)はフランス語の定冠詞について考察する際に、定冠詞とそれ以外の定の決定詞の相違点として、前者には特徴づけという機能がない点を指摘している。指示形容詞は、指示性の高さによって特徴付けを行っていると言える。指示形容詞は、発話状況において存在する事物を直接指示する直示表現に代表されるように、極めて指示性の高い要素である。これに対して定冠詞は、談話において既に導入されているなどの理由によって、聞き手が名詞句の指示対象を容易に特定できるような状況において用いられる。このことから、指示性という観点からは両言語において定冠詞と指示形容詞に関して共通の位置づけがなされているために、定冠詞と指示形容詞との対応は低い比率でしか観察されないという結果となっていると考えられる。

ここで、スペイン語とイタリア語の指示形容詞について、重要な相違点を指摘することは有意義であろう。スペイン語では、発話者からの距離によって近称・中称・遠称という三つの形式が区別されるのに対して、イタリア語においては近称と中遠称の二つの区別しか存在しない。定冠詞に対応する指示形容詞がどのタイプかを見てみると、スペイン語で指示形容詞が用いられる場合、全体で 39 例のうち 30 例が遠称であり、76.9%を占める。また、イタリア語で指示形容詞が用いられる 32 例のうち、中遠称が 26 例で 81.3%となっている。この事実は、指示形容詞の中でも近称の機能が定冠詞と重なりが少ないということを示していると言える。近称は話者に近い対象を指示するのが基本的な機能であり、照応的に用いられる場合も直近の要素を指示する。このことから、指示形容詞の中でも特に指示性が高いと考えられ、指示性の低い定冠詞との交替が難しいと言えよう¹⁰。

4. イタリア語の定冠詞がスペイン語の所有形容詞に対応する場合

以下では、スペイン語の定冠詞とイタリア語の定冠詞がそれぞれ異なる要素に対応している例の中で、特に数が多いものについて検討を進める。本節では、イタリア語の定冠詞がスペイン語の所有形容詞に対応する場合を考察する。

イタリア語の定冠詞がスペイン語において所有形容詞で現われている例は、116 例あり、全体の 2.7%を占めている。スペイン語の定冠詞がイタリア語において所有形容詞で現われている例が 21 例で全体の 0.5%に過ぎないことを考慮すると、これは一定

¹⁰ スペイン語において中称よりも遠称の対応例が多いという事実は興味深い。この事実は、1.1 で言及した、Salvá(1988)がスペイン語の定冠詞は 3 人称人称代名詞と遠称の指示形容詞 *aquel* と極めて密接な関係を保っていることを具現化している。遠称の機能の本質が、話し手と聞き手のいずれからも離れている実体を指すという点にあり、その意味で 3 人称と共通しているとすれば、コミュニケーションに關与する当事者と関係性が低いと言える。この特徴と定冠詞の指示性の低さに調和性があるというのがその一つの要因と考えられよう。この点については、指示形容詞についての綿密な検討が必要となるので、今後の課題としたい。

の比率を占めていると言える。イタリア語において所有を表す定冠詞がどのような分布になっているかを見るためにこれを文法機能ごとに分けてみると、主なものは前置詞の目的語 64 例 (55.2%)、直接目的語 31 例 (26.7%)、主語 (倒置主語含む) 16 例 (13.8%) となる。以下にそれぞれの例をあげる。

i. 前置詞の目的語

(11) a. ... e la luce del candeliere illuminò una lumaca sbandata sul soffitto,
and the light of the candlestick illuminated a snail dispersed on the ceiling
con la scia di bava argentea.
with the wake of dribble silver (イタリア語 BR p.12)

b. ... y la luz del candelero iluminó un caracol extraviado por el cielo
and the light of the candlestick illuminated a snail got lost by the ceiling
raso, con su estela de baba de plata.
with its wake of dribble of silver (スペイン語 BR p.25)

“ 蠟燭の光が、銀色の粘液をあとに引きながら逃げ出しているかたつむりを天井に一匹照らし出した。”

(12) a. Camini non era lontana e la servitù dell'ambasciatore inglese poteva
chimneys not was far and the servant of the ambassador English could
accorrere in aiuto dei compatrioti.
rushed in help of the countrymen (イタリア語 AL p.63)

b. Además, la casa de las Siete Chimeneas no estaba lejos, y la servidumbre
besides the house of the seven chimneys not was far and the servant
del embajador inglés podía venir en auxilio de sus compatriotas.
of the ambassador English could come in help of his countrymen
(スペイン語 AL p.88)

“ おまけに七つの煙突の家から遠くはなかったので、イギリス大使の使用人が同胞を助けに来てくれるかもしれなかった。”

ii. 直接目的語

(13) a. Era là, rattratto, ne vedeva la pancia dal lungo pelo quasi bianco,
it was there contracted its saw the belly of the long hair almost white
le zampe tese con le unghie nel legno ...
the legs stretched with the nails in the wood (イタリア語 BR. p.61)

b. Allí estaba, contraído, veía su barriga de largo pelo casi blanco,
there it was contracted saw its belly of long hair almost white
sus patas tensas con las uñas en la madera ...
its legs stretched with the nails in the wood (スペイン語 BR.p.66)

“ そこに身をちぢめて、長い毛の白い腹を見ながら、木に爪をたてた足を伸ばしていた。”

(14) a. «Non è un caso» guardò il compagno e poi il capitano, con rinnovata
 it not is an accident watched the companion and then the captain with renewed
 attenzione.
 attention (イタリア語 AL p.78)

b. —Esto no es casual — miró a su compañero y luego al capitán, con renovada
 this not is accidental watched his companion and then the captain with renewed
 atención.
 attention (スペイン語 AL p.106)

“「これは偶然ではない。」と言って仲間を見てから、彼は再び大将を見つめた。”

iii. 主語

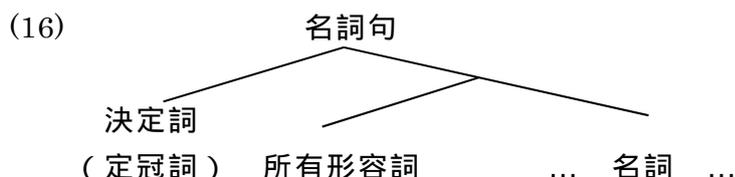
(15) a. ...ma che si era visto costretto a impugnare la spada perché gli amici
 but that he was forced to take the sword because the friends
 e le dame lo stavano guardando.
 and the ladies him were watching (イタリア語 AL p.66)

b. ...pero que se vio forzado a meter mano al acero porque sus amigos
 but that he was forced to put hand to the sword because his friends
 y las damas lo estaban mirando.
 and the ladies him were watching (スペイン語 AL p.90)

“しかし友人とご婦人方が見ている手前、彼は剣に手をかけざるを得なかつた。”

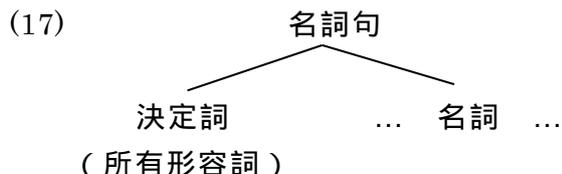
スペイン語において所有形容詞に対応している事実からも分かるように、これらの例においてイタリア語の定冠詞は所有の意味をもっていると言える。スペイン語の定冠詞にも所有を表す機能は見られるため¹¹、両言語において定冠詞が所有の機能を担っているという特徴は共有されているが、その頻度において差があるということになる。では、この差はどのような要因によるものと考えられるであろうか。

一つの可能性として、イタリア語における所有形容詞の用法が一因だと考えられる。イタリア語の所有形容詞はスペイン語のそれとは異なり、通常冠詞を伴うことが義務的であり、中でも定冠詞と共起する場合が大半である。これを名詞句の統語構造という観点から考えると、決定詞の位置に定冠詞が現れ、所有形容詞は名詞を修飾する要素として別の位置に生起するということになる。



これに対して、スペイン語の所有形容詞は冠詞と共起しないため、それ自身が決定詞の位置に生起することになる。

¹¹ 注 5 を参照されたい。



上記の二つの構造を比較すると、明らかにスペイン語の構造がより簡潔なものとなっている。従って、イタリア語では複雑な名詞句構造を避けるために、統語的文脈等によって復元が可能な場合には所有形容詞を省略し、定冠詞のみを伴うより簡潔な構造で所有の意味を表すことが頻繁に行われるのである。

最後に、文法機能における分布の偏りについて触れておきたい。この対応パターンにおいて極めて高い割合を占めるのが前置詞の目的語と直接目的語であるが、これは定冠詞が所有の意味を表す場合、その名詞句の指示対象の所有者が主語で表されるという構造が最も一般的なためであると言える。主語以外の文法機能で最も多く生起するのはこの両者であるために、頻度が極めて高いのである。しかし、主語名詞句における定冠詞が所有の意味をもつ場合も一定数観察される。これは、間接目的語等の文中の要素が所有者を表したり、文脈によって所有者が了解されることが可能であるためである。前者の用法は文中の先行詞によって束縛される再帰代名詞的機能、後者は人称代名詞と同様に比較的遠い位置にある要素と同一指示となる代名詞的機能と捉えることができる¹²。このように、所有者が構造上、あるいは文脈上明らかな場合において、イタリア語では定冠詞の所有を表す機能はかなり広い範囲で許容されると言える。

5. 定冠詞とゼロ冠詞の対応

本節では、一方の言語における定冠詞が他方の言語でゼロ冠詞に対応している例について考察する。具体的なデータを検討する前に、両言語においてゼロ冠詞がどう捉えられているかを先行研究をもとに概観する。

5.1. スペイン語のゼロ冠詞

スペイン語においては、ゼロ冠詞は使用範囲が広いと言える。まず、数えられない要素を指示する名詞の場合に、通常ゼロ冠詞が生起する。また、複数名詞がゼロ冠詞で生起する例はかなり広く観察される。Martínez Álvarez(2000)は、複数を示す形態素が非連続的な要素¹³を指示する名詞を加算可能にすることで、名詞の現働化がなされるために冠詞が必要とされないとする。Laca(1999)は、ゼロ冠詞名詞句は必ず文脈に依存して解釈され、それ自体で特定の個物や事物の部分を指示することができないと説明する。このため、話者の評価に関わる修飾要素を伴う場合には、不定冠詞の使用が義務的になるとする。

¹² 生成文法の観点からは、再帰代名詞的機能は照応表現(anaphor)、代名詞的機能は代名詞表現(pronominal)にそれぞれ対応するものである。

¹³ 一般に「数えられる」要素と呼ばれるものは、意味論的には「非連続的な」要素と捉えられ、「数えられない」要素は「連続的な」要素と捉えられる。

(18) a. Solía plantearnos unas preguntas difícilísimas.

he used to raise us 不定冠詞複数形 questions very difficult

“彼は私たちに非常に難しい問題を提起したものだ。”

b. Nos ofrecieron un vino delicioso.

they us offered a wine delicious

“とてもおいしいワインが私たちに出了された。”

Matte Bon(1995)はゼロ冠詞名詞句においては演算子 φ が関与すると分析するが、この演算子は名詞によって表わされる概念・範疇を直接的に指示すると主張しており、Laca と基本的に同じ方向性にあると言える。

更に、数えられる要素を指示する名詞においても、スペイン語においてゼロ冠詞が単数形の名詞で用いられることがある。Martínez Álvarez は非連続的(discontinuo)な要素を表す単数形の名詞が主語として生起する場合には冠詞を義務的に伴うが、目的語の場合にはゼロ冠詞が生起することができるという事実を指摘する¹⁴。

(19) a. Ya tiene coche.

you already have car

“もうあなたは車を持っています。”

b. Hay perro.

there is dog

“犬がいる。”

この場合の名詞句は特定の個別要素を指示するのではなく、名詞が表している集合に含まれる要素に共通の部分を示しており、数えられる名詞であってもその集合を連続的(contínuo)なものとしてとらえていることを示しているとする。また、Laca はこのような無冠詞名詞句の使用は例外的なものであり、より特定の条件、すなわち非連続的な要素を指示する名詞が単数形で生起するには、その存在が一般的に予想されるものであるという条件があると主張する。(19)では、車を所有するという状態や犬という動物の存在が文化的に十分予想される事態であるために、ゼロ冠詞の単数名詞での使用が可能となる。

上記の議論をもとにすると、非連続的な要素を指示する名詞の場合、単数形では冠詞の生起が義務的であるのに対し、複数形ではゼロ冠詞が広く観察されると言える。

5.2. イタリア語のゼロ冠詞

Renzi et al.(2001)は、単数形では、物質名詞や物質名詞として扱うことのできる抽象名詞の場合に、特定のでない不定の名詞がゼロ冠詞で生起できるとしている。特に直接目的語の場合に頻繁に見られ、動詞に後続する主語の場合にも観察される。動詞に先行する主語の場合には、ゼロ冠詞はまれである¹⁵。

¹⁴ (19b)のゼロ冠詞名詞句は厳密には直接目的語ではないが、動詞« haber »は存在する事物を提示する機能をもつ。その意味で、「 haber »に後続する名詞は対象としての意味役割を担っていると考えることができる。対象の意味役割を担う名詞句は、生成文法による分析では、基底において動詞の補部の位置、すなわち通常目的語が占める位置にあるとされる。つまり、「 haber »に後続する名詞句は統語的には直接目的語と同じステータスをもつと考えられるのである。

¹⁵ 名詞がある種の修飾要素を伴う場合には、以下の例にあるように、動詞の前でもゼロ冠詞で生起することができる。

(20) a. Preferite burro o margarina?

do you like butter or margarine “バターがいいですか、マーガリンですか？”

b. Si è versato latte.

spilled milk “牛乳がこぼれた。”

数えられる名詞の場合には、特殊な文体を除いて単数形でゼロ冠詞が生起することはない¹⁶。

複数形では、やはり特定のでない不定の名詞が、i)動詞に後続する主語(21a)、ii)直接目的語(21b)、iii)前置詞の目的語(21c)のいずれかである場合にゼロ冠詞が生起しうると Renzi et al.(2001)は述べている。

(21) a. Ci sono ancora giornali in edicola a quest'ora.

there are still newspapers at shop at this hour

“この時間だったらまだお店に新聞はあるよ。”

b. Mi ha regalato rose.

he me presented roses “彼は私に薔薇を贈ってくれた。”

c. Lavoravamo per committenti occasionali.

we worked for buyers occasional

“私たちはたまにある注文主のために働いたものだった。”

動詞に先行する主語の場合には、高度に文語的な文体においてのみ許容される。

上記の議論をもとにすると、イタリア語においても、数えられる要素すなわち非連続的な要素を指示する名詞の場合、単数形では冠詞の生起が義務的であるのに対し、複数形ではゼロ冠詞が比較的広く観察されると言える。

5.3. スペイン語の定冠詞 イタリア語のゼロ冠詞

スペイン語の定冠詞がイタリア語においてゼロ冠詞で現われている例は、240例あり、全体の5.9%を占めている。イタリア語においてゼロ冠詞が生起する要因は様々なものが考えられるが、ここでは文法的機能に注目することによって考察を進めていきたい。つまり、イタリア語においてゼロ冠詞となっている名詞句が文においてどのような機能をもつものが多いか、その分布を考慮するということである。

最も多く観察されたのは、前置詞の目的語として現れている例であるが、206例あった。これは、ゼロ冠詞が生起している240例のうち85.8%と圧倒的な比率を占めている。以下に例をあげる。

Latte di questa qualità è raro.

milk of this type is rare “この種の牛乳は珍しい。”

これは、後述する複数形の場合も同様である。

Amici così gentili sono sempre graditi.

friends so kind are always welcome “そんなに優しい友人はいつだってありがたいものだ。”

¹⁶ 数えられる名詞が修飾要素を伴った重い(pesante)名詞句として動詞より前に置かれた直接目的語である場合、ゼロ冠詞で生起することがあるが、文語的なスタイルである。また、主語や動詞に後続する目的語としてゼロ冠詞で生起する例も見られるが、古典的な文体に限られる。

(22) a. Al fin y al cabo, es tu cuello el que está en juego.

at the end and at the edge it is your neck that is in play

(スペイン語 AL p.115)

b. In fin dei conti, sei tu che ti stai giocando l'osso del collo.

in end of the counts it is you that are playing the bone of the neck

(イタリア語 AL p.87)

“どっちにしても、かかっているのはお前の首だ。”

(23) a. La manzana se le cayó de la mano y rodó al pie de la magnolia.

the apple him fell of the hand and rolled at the foot of the magnolia

(スペイン語 BR p.31)

b. La mela le cadde di mano e rotolò al piede della magnolia.

the apple him fell of hand and rolled at the foot of the magnolia

(イタリア語 BR p.20)

“りんごが彼の手から落ちて、木蓮の根もとに転がった。”

これに続くのは直接目的語で 15 例あり、その比率は 6.3%となる。この二つの文法機能で全体の 92.1%を占めており、それ以外のは散発的に見られるのみである。

まず前置詞の目的語についてゼロ冠詞の対応例がなぜ多いのかを考察してみたい。これには二つの要因が考えられる。一つは個々の前置詞が補語となっている名詞句に対して課すもので、もう一つは特定の名詞と前置詞が結びつく連辞関係によって生じるものである。

前者については、ゼロ冠詞名詞句をとる前置詞には偏りが見られるという現象に現れている。最も用例数が多いのは in で 80 例あり、前置詞全体の 38.8%を占めている。これに続いて a が 56 例で 27.2%、di が 37 例で 18.0%、per が 9 例で 4.4%、da が 6 例で 2.9%となっている。それ以外の前置詞は数が少なく、散発的である。これらの前置詞に共通するのは、前置詞固有の語彙的意味が希薄で、名詞句と他の要素とをある関係で連結するという文法的機能をもつという特徴をもっているという点である。このため、音韻的には短い単音節語として実現されている¹⁷。このように文法的な性格の強い要素は、これが補語としてとる名詞句と緊密な関係を結ぶ傾向があるとすると、その間に介在する定冠詞を脱落させるのも自然な帰結であると言える。

これと関連すると考えられるのは、ロマンス諸語に多く見られる前置詞と定冠詞の融合という現象である。イタリア語はこの現象が顕著に見られる言語であり、多くの単音節語において観察される。

(24) a. a + il al a + la alla

b. di + il del di + la della

¹⁷ 語彙的な意味が強い前置詞は、dopo「～の後で」、sotto「～の下で」、senza「～なしで」のように多音節語として実現される。また、di と a が文法的に連結要素としての機能しか果たさない場合もあることは興味深い事実である。davanti a「～の前に(場所)」, prima di「～までに」では、前置詞 a, di は何ら意味的な貢献はしていない。

c. in + il nel in + la nella

上位に位置する三つの前置詞は、いずれも融合形をもっている。特に、上に見られるように、in は他の前置詞とは異なり、語頭音/i/が融合形において生じない唯一の前置詞である。in の生起数が多いのは、形式がかなり異なる融合形の使用を避けるという傾向が強く表れていると解釈することができる。

更に、上位二つの前置詞 in と a は 6 割以上の比率を占めているが、いずれも場所を表す機能が最も基本的な意味機能となっている前置詞である。特に、su(~の上に) や sotto(~下に) などよりもより基本的な位置関係を示す機能をもっている。このことから、場所を表す前置詞がゼロ冠詞の名詞と結びつきやすいという傾向が浮かび上がってくる。

二つ目の特定の名詞と前置詞が結びつく連辞関係については、特定の名詞が前置詞と結びつく例が一定数見られるという点に現れている。多く見られるものをあげると、terra「地面」20例、mano「手」¹⁸12例、tavola「テーブル」12例、cima「頂、端」9例、corte「宮廷」9例、strada「道路」8例、calle「小路」7例、fondo「奥」6例となる。これらの例で特筆すべきなのは、いずれも場所を表すあるいは表すことのできる名詞であるということである。手やテーブルも場所を表すことが多いと言える。特定の前置詞との結びつきが多い例も見られ、例えば terra は a が 11 例で da が 4 例であり、mano は in が 10 例、tavola は a が 7 例で in が 4 例、cima は in が全 9 例、corte は a が 8 例、fondo は in が全 6 例となっている。このことから、イタリア語では場所を表す特定の名詞が定冠詞を伴わずに前置詞と結びつく傾向がある程度見られるとすることができる。この事実は、場所を表す前置詞がゼロ冠詞名詞句を取りやすいという先の観察に合致したものである。場所を表す前置詞が場所を表しやすい名詞と結びつくときに、ゼロ冠詞が生起することによってより緊密で簡潔な形式となり、前置詞句全体が一つのまとまった場所表現として認識されることになると考えられる。

次に、直接目的語に一定の比率で見られるのはなぜかを考えてみよう。この場合、固定化された表現になる場合が多いという傾向が見られることに気づく。つまり、動詞と特定の名詞が結びついて語彙的なまとまりをなす表現になるということである。表現として固定化されると、一般に冠詞が脱落するという傾向が見られる。以下に具体例をあげる。

(25) a. Ni siquiera el enmasacarado de la cabeza redonda se atrevía a abrir la boca.
not even the masked of the head round dared to open the mouth
(スペイン語 AL p.63)

b. Neppure il tipo mascherato dalla testa rotonda si azzardava ad aprire
not even the fellow masked of the head round dared to open

¹⁸ 「手」は身体部位を表す名詞であるが、以下のように事物の場所として用いられることも多い。

Che cosa tieni in mano?
what you have in hand “手に何をもっているの?”

bocca.

mouth

(イタリア語 AL p.43)

“丸い頭の仮面の男でさえ口を開こうとはしなかった。”

- (26) a. Se sentó en una rama de la morera por encima de la mía y se puso a hacer
he sat on a branch of the mulberry over mine and began to make
muescas con el espadín, como si no quisiera dirigirme la palabra.
notches with the sword as if he not wanted direct me the word

(スペイン語 BR p.38)

- b. Si sedette su un ramo del gelso più in su di me e si mise a farci delle
he sat on a branch of the mulberry over me and began to make some
tacche con lo spadino, come se non volesse rivolgermi parola.
notches with the sword as if he not wanted direct me word

(イタリア語 BR p.28)

“私より高い桑の枝に腰をおろして、まるで私に言葉をかけたくないとでもいうように、そこで剣でしるしを刻み始めた。”

上記の aprire bocca (口を開く、言葉を発する), rivolgere parola (言葉をかける)に加えて他に該当する例としては、apparecchiare tavola (食卓の支度をする), mettere piede (足を着ける、下りる), prendere sonno (まどろむ), toccare terra (上陸する、着陸する)があり、動詞と名詞が固定的に結びつき、特定の概念を表す表現となっている。これとは別に、lavare faccia e mani (顔と手を洗う)のような並列構造のものや、sporgere differenti antenne (いろいろな触覚を突き出す), seguire movimenti (動きに倣う)のように複数形名詞を目的語に取る例もある。名詞句の並列においてゼロ冠詞が用いられる例は、文体に依存する現象であるが、一定数観察される。また、イタリア語は不定の複数名詞がゼロ冠詞を伴う場合が多いので、定と不定の境界線上にあるような名詞句の場合、ゼロ冠詞が選択されることがあると考えられ得る。

以上に見られる傾向に対して、文法機能として重要である主語としての例は極めて少ない。用例は5例に過ぎず、全体の2.1%にとどまる。

- (27) a. ...o los matones a sueldo y los salteadores acechaban a sus víctimas
or the thugs on salary and the highwaymen spied on their victims
en la oscuridad de las calles desprovistas de alumbrado.

in the dark of the streets devoid of lighting (スペイン語 AL p.45)

- b. ...e sicari e briganti tendevano l'agguato alle loro vittime
and hired assassin and brigands set the trap for their victims
nell'oscurità delle strade prive di illuminazione.

in the dark of the streets devoid of lighting

(イタリア語 AL p.28)

“金で雇われた殺し屋や追いはぎが、明かりのない通りの暗がりて獲物を待ち伏せていた。”

この事実は、前置詞の目的語や直接目的語の場合の裏返しであると言える。主語とい

う要素は、統語的に動詞句の外にあると分析されることが多いように、固定化された熟語表現の一部を形成することは多くはない¹⁹。このことが、前置詞の目的語や直接目的語にゼロ冠詞が多く見られたのに対して、主語において少ないという事実の一つの要因となっていると言えよう。

5.4. イタリア語の定冠詞 スペイン語のゼロ冠詞

イタリア語の定冠詞がスペイン語においてゼロ冠詞で現われている例は、377例で全体の8.6%を占めており、かなり高い比率となっている。スペイン語の定冠詞がイタリア語においてゼロ冠詞で現われている比率は5.9%であったので、イタリア語に比べてもスペイン語ではゼロ冠詞の生起する比率が高いと言える。ただ、いずれの対応も他の形式での対応例に比べて著しく多いと言えるので、両言語間でゼロ冠詞について有意な違いを現段階では指摘することはできない。スペイン語におけるゼロ冠詞は、Laca(1999)が指摘しているように、それ自体では指示能力がなく、必ず文脈に依存して解釈される。この点を踏まえて、以下では5.3と同じように文法機能ごとの分布をみていくこととする。

最も多く見られるのは、イタリア語の場合と同様に前置詞の目的語で、278例があり、全体の73.7%を占めている。これに続くのが直接目的語で、61例あり、16.2%となる。この二つで9割近くを占めており、それ以外のものは散発的にしか見られないという点もイタリア語のゼロ冠詞の場合と共通している。以下に例をあげる。

i. 前置詞の目的語

(28) a. A me una volta mi ci hanno sparato col sale!
to me once me there shot with the salt (イタリア語 BR p.41)

b. A mí una vez me dispararon con sal.
to me once me shot with salt (スペイン語 BR p.50)
“一度おれに塩をぶっかけたぞ。”

(29) a. Il capitano si strinse nelle spalle.
the captain shrugged the shoulders (イタリア語 AL p.82)

b. El capitán se encogió de hombros.
the captain shrugged shoulders (スペイン語 AL p.110)
“大将は肩をすくめた。”

ii. 直接目的語

(30) a. La bambina passò vicino a terra, invece di darsi la spinta frenò con un
the girl passed near ground instead of give the impulse stopped with a
rapido sgambettio, e saltò giù.
quick stamping and jumped down (イタリア語 BR p.22)

b. La niña pasó cerca del suelo, en vez de darse impulso frenó con un rápido
the girl passed near the ground instead of give impulse stopped with a quick

¹⁹ 生成文法をはじめとする統語理論において、文の構造において主語が階層的に高い位置に位置づけられることは、このような言語直観を反映しているものと言える。

pataleo, y se bajó.

stamping and descended

(スペイン語 BR p.33)

“少女は地面の近くを通り、反動をつける代わりに、すばやく足を踏みかえて止まると、飛び降りた。”

(31) a. ...e a lui, invece, avrebbero tagliato la gola prima che avesse il tempo
and to him instead they would have cut the throat before he had the time
di sguainare la spada.

to draw the sword

(イタリア語 AL p.81)

b. ...y a él, sin embargo, le rebanarían el gárgamo antes de que tuviera
and to him however they him sliced through the throat before he had
tiempo de echar mano a la blanca.

time to lay hand on the sword

(スペイン語 AL p.109)

“彼は剣に手をやる間もなく喉を切り裂かれるだろう。”

直接目的語について注目されるのは、イタリア語に比べて比率が高いという点である。イタリア語は 15 例で 6.3%であったのに対して、スペイン語は 16.2%となっている。イタリア語のゼロ冠詞の場合と同様に、動詞と特定の名詞が結びついて語彙的なまとまりをなす表現になっている場合が一定数観察される。abrirse camino「道を切り開く」、dar tiempo「時間を与える」、echar mano「手を伸ばす」、hacer ademán「様子を見せる」、quitar ojo「目をそらす」、tener aspecto「～の様子である」、traer recado「伝言を届ける」などである。この他に、incluir prisión, tortura, hoguera y muerte「刑務所、拷問、激情と死を含む」のような並列表現や buscar palabras「言葉を探す」や dar pasos「歩を進める」など目的語が複数形名詞になっているものもある程度見られる点もイタリア語と共通している。ゼロ冠詞単数名詞と動詞の結びついた表現の種類が 22 種類見られ、イタリア語の 6 種類に比べるとかなり多くなっているのが特徴的である。これは、スペイン語では単数名詞にゼロ冠詞が出る頻度が高いという傾向によるものであると考えられる²⁰。

これに対して、主語（倒置主語を含む）の例は 18 例であり、4.8%に過ぎない。

(32) a. Nel pelo, tutto ritto, che gonfiava attorno al collo rattratto un collare
in the hair all erect that swelled around the neck contracted a scarf
biondo, e di lì si dipartivano le strie che fremevano sui fianchi
blond and from there started the stripes that trembled on the waist
come carezzandosi da sé.

as caressing himself

(イタリア語 BR p.60)

b. Con el pelo, todo tieso, que se hinchaba en torno al cuello contraído en un
with the hair all erect that swelled around the neck contracted in a

²⁰ スペイン語とイタリア語の不定冠詞の分布について論じた Fujita(2013)では、スペイン語においてゼロ冠詞がイタリア語より多く用いられることが述べられている。

collar rubio, y desde allí partían estrias que temblaban en los flancos como scarf blond and from there started stripes that trembled in the waist as acariciándose entre sí.

caressing himself

(スペイン語 BR p.66)

“毛をすっかり逆立てて、ちぢこめた首のまわりではブロンドの襟巻をつけたようにふくれあがっていたし、そこからは縞になって、まるで自分を愛撫しているかのように腰のあたりで震えていた。”

イタリア語のゼロ冠詞ほど少なくはないが、やはりかなり低い比率であることは否めない。その理由は既に述べたように、主語という文法機能をもつ要素が文において占める構造的な位置づけによって説明される。

前置詞については、イタリア語と異なる特徴が観察されるので、ここで考察を進めたい。まず、ゼロ冠詞名詞句をとる前置詞で最も生起例が多かったのは *de* で 125 例であり、全体の 45.0% を占めている。これに続くのが *en* と *con* でいずれも 33 例あり、それぞれ 11.9% を占める。他に生起例が比較的多いのは *por* の 29 例(10.4%)、*a* の 26 例(9.4%)であり、これら上位 5 つの前置詞で全体の 88.5% を占めている。イタリア語の場合と同様に、いずれも語彙的内容が希薄である文法的要素であるが、イタリア語では *in* が最も多かったのに対して、スペイン語でこれに対応する *en* は *de* よりもはるかに生起例が少ない点が異なっている。これは、定の機能をもつゼロ冠詞を選択する前置詞に両言語で違いが見られることを示唆している。5.3 で観察したように、イタリア語で 6 割以上を占める上位二つの *in* と *a* はいずれも場所を表す機能が最も基本的な位置を占める前置詞である。これに対して、スペイン語の上位 5 つの前置詞のうち、場所を表す機能を基本とする前置詞は *en* と *a* であるが、この二つを合わせても全体の 21.2% を占めるに過ぎない。従って、スペイン語では場所を表す機能をもつものに限らず、文法機能を担う単音節の前置詞がゼロ冠詞名詞句と結びつきやすいという傾向が見られると言える。

次に、前置詞の目的語として生起するゼロ冠詞名詞を見てみると、イタリア語の場合ほど生起例が多い普通名詞は見られない。最も多いのは *fin* 「目的」と *vez* 「回」のいずれも 9 例であるが、どちらも場所を表す名詞ではない。むしろスペイン語で目立つのは国名の 20 例、*otro* 「他の人(もの)」という不定代名詞の 14 例、不定詞の名詞化の 14 例である。固有名詞、特に国名に定冠詞がつくかどうかは個々の語彙の問題ではなく、定冠詞の用法に関わる文法的な問題である。また、不定代名詞、不定詞の名詞化のいずれも統語的な要素が関わってくる文法的な問題と言える。このことから、スペイン語においてゼロ冠詞が生起する条件はイタリア語とは異なり、より文法的な側面が強いということができると言える。

なお、不定詞の名詞化において定冠詞が生起することがあるというのはイタリア語に典型的な特徴であると言える。

(33) L'aver detto ciò non ti giustifica.

the have said that not you justifies

“ そう言ったからといってそれが君を正当化するものではない。”

英語では動名詞、フランス語では裸の不定詞がこの機能を担うが、イタリア語ではしばしば定冠詞を伴うのである。定冠詞が生起するということは、統語的にはその句は名詞句であるということの意味するので、この場合の不定詞は完全に名詞としての機能を果たしていると言うことができる。スペイン語でも以下のように、不定詞が定冠詞を伴うという現象は見られる。

(34) a. El ver es padre del saber.

the see is father of the know

“ 経験は知識のもとである。”

b. Carmen se cayó al entrar en la habitación.

fell down in the enter into the room

“ カルメンは部屋に入ろうとして倒れた。”

しかし、上記の例のように格言や「al+不定詞」のような語彙化された形で用いられる場合が多く、イタリア語ほど生産性が高いものではない。集計結果からも、イタリア語の裸の不定詞がスペイン語において定冠詞を伴った不定詞となっている例は一例も見られず、この傾向を裏付けている²¹。

6 . 結論

本稿では、スペイン語とイタリア語における定冠詞の分布と他の要素との対応関係をもとに、両言語における定冠詞の特性を対照的に考察してきた。特に一方の言語における定冠詞が他方において定冠詞以外の要素に対応する場合に焦点をあてると、興味深い結果が得られた。まとめると、以下のように言える。

- i) 定性という点で共通の性質をもつ指示形容詞との対応例は、両言語において少なく、定冠詞と指示形容詞の機能分化はかなり明確であると言える。また、定冠詞に指示形容詞が対応する場合、両言語において話者から遠い位置にあるものを指示する形容詞が用いられるという共通の傾向がある。
- ii) 定性に関して対立する性質をもつ不定冠詞との対応例は、両言語において少ない。
- iii) 所有形容詞との対応例は、イタリア語に比してスペイン語においてかなり高い比率を示す。この事実は、イタリア語の所有形容詞がスペイン語とは異なり、決定詞の位置を占めていないという統語的特徴に起因すると考えられる。
- iv) ゼロ冠詞との対応例は、いずれの言語においてもかなりの比率で観察される。この事実は、両言語において定冠詞とゼロ冠詞との間にある程度の機能的連続性があることを示唆している。特に分布上目立つのは前置詞の目的語であるが、これは前置詞が、補語としてとる名詞と統語的にも意味的にも緊密な関係にあることに起因す

²¹ 「al+不定詞」は語彙化された表現であるため、集計からは除外している。

ると考えられる。また、イタリア語では場所を表す前置詞句にゼロ冠詞が多く観察されるが、スペイン語ではより広い意味領域で観察される。直接目的語にゼロ冠詞が生起する例も、イタリア語よりスペイン語の方がより多くのタイプの表現が見られる。このことは、イタリア語よりもスペイン語の方がゼロ冠詞が用いられる範囲が広いという傾向によるものであると考えられる。

ここで、iv のゼロ冠詞について若干補足しておきたい。5.3 節及び 5.4 節の議論から、ゼロ冠詞の出現は語彙的な単位として認定される語彙化と密接な関連があると言いうことができる。語彙化によって、構成要素としての名詞句の指示性は弱まると考えられるが、これは Laca(1999)の述べる、それ自体で特定の個体を指示することができず、文脈に依存して解釈されるという特性と関連付けて考えることができる。つまり、それ自体の指示性が低いために、生起する環境においてのみ解釈されるということである。語彙化の場合には語彙化された単位がその環境に該当し、その単位内で共起する他の要素との連辞的關係によって初めて解釈が可能になるという点で、文脈依存と共通しているのである。このように考えると、本稿で考察してきた定冠詞との対応という点では、ゼロ冠詞の生起には三つの要因が関与すると言える。すなわち、Laca の指摘する文脈、語彙化、そして統語的な位置である²²。この三つの要素は独立したものではあるものの、既に指摘したように相互に関連する性質をもっている。三者の関係については、より詳細な考察を進めていく必要がある。

本稿の考察から、両言語の定冠詞は基本的な性質は共有しているものの、一部でその機能に相違点があると言える。特に、定冠詞とゼロ冠詞との関係、中でも前置詞の目的語において顕著な特徴が見られるという点は、従来指摘されていないものである。本研究で明らかになったのは、定冠詞を含む決定詞の体系を考察する上で、ゼロ冠詞の位置づけが重要であるという点である。本稿では一方の言語における定冠詞に対応するゼロ冠詞のみを考察の対象にしているため、それ以外のゼロ冠詞の分布や特徴については触れることができなかった。今後の大きな課題として、ゼロ冠詞が両言語においてどのような機能を持ち、どのような分布を示すのかという問いに対する答えを追究することがあげられるが、これは非常に大きなテーマである。この問題に関する包括的な議論の中で、上に述べた三要因の関係についての考察も深めていくべきであろう。本研究はロマンス諸語における決定詞体系をとらえ直すという最終的な目標を設定しているため、今後の課題として考察を進めていきたい。

参考文献

- Andorno, Cecilia (1999) *Dalla grammatica alla linguistica*, Paravia, Torino.
Bellini, Giuseppe (1994) *Grammatica della lingua spagnola*, LED, Milano.
Butt, John and Carmen Benjamin (2004) *A New Reference Grammar of Modern Spanish*, Arnold, London.

²² 語彙化と Laca の指摘する文脈依存の関係、及びゼロ冠詞生起の要因についての考察は、査読者による指摘を参考に行ったものである。

- Carrera Díaz, Manuel (1985) *Manual de gramática italiana*, Editorial Ariel, Barcelona.
- _____ (2012) *Grammatica spagnola*, Editori Laterza, Roma.
- De Bruyne, Jacques (1995) *A Comprehensive Spanish Grammar*, Blackwell Publishing, Oxford.
- Dardano, Maurizio and Petro Trifone (1997) *La nuova grammatica della lingua italiana*, Zanichelli, Bologna.
- Fujita, Takeshi (2013) “Distribuzione sintattica dell’articolo indeterminativo in italiano e in francese”, 『北海道大学文学研究科紀要』, 第 140 号, pp.99-129.
- Hernández Alonso, César (1984) *Gramática funcional des español*, Gredos, Madrid.
- Laca, Brenda (1999) “Presencia y ausencia de determinante”, in Bosque, Ignacio and Violeta Demonte (eds.), *Gramática Descriptiva de la Lengua Española*, pp.891-928, Espasa, Madrid.
- Larousse (2003) *Gramática Italiana*, SPES Editorial, Barcelona.
- Leeman, Danielle (2004) *Les déterminants du nom en français : syntaxe et sémantique*, Presses Universitaires de France, Paris.
- Leonetti, Manuel (1999) “El artículo”, in Bosque, Ignacio and Violeta Demonte (eds.), *Gramática Descriptiva de la Lengua Española*, pp.787-890, Espasa, Madrid.
- López García, Ángel (1998) *Gramática del español III. Las partes de la oración*, Arco Libros A.A., Madrid.
- Maiden, Martin and Cecilia Robustelli (2000) *A Reference Grammar of Modern Italian*, Arnold, London.
- Martínez Álvarez, Josefina (2000) “Nombres discontinuos y artículo”, in Alvar, Manuel (ed.), *Introducción a la Lingüística española*, pp.299-305, Editorial Ariel, Barcelona.
- Matte Bon, Francisco (1995) *Gramática Comunicativa del español Tomo I*, edelsa, Madrid.
- Proudfoot, Anna and Francesco Cardo (2013) *Modern Italian Grammar*, Routledge, London and New York.
- Renzi, Lorenzo et al. (2001) *Grande grammatica italiana di consultazione*, il Mulino, Bologna.
- Salvá, Vicente (1988) *Gramática de la lengua castellana I*, Arco Libros A.A., Madrid.
- Satorre Grau (2000) “El artículo”, in Alvar, Manuel (ed.), *Introducción a la Lingüística española*, pp.271-298, Editorial Ariel, Barcelona.
- Sensini, Marcello (1997) *La grammatica della lingua italiana*, Oscar Mondadori, Milano.
- Serianni, Luca (1997) *Italiano*, Garzanti Editore, Milano.
- Tavoni, Otello (2001) *Grammatica spagnola*, Murena Editrice, Cortona.
- Trifone, di Pietro and Massimo Palermo (2000) *Grammatica italiana di base*, Zanichelli, Bologna.
- 寺崎英樹 (1998) 『スペイン語文法の構造』, 大学書林, 東京.
- 藤田健 (2013) 「フランス語とイタリア語における部分冠詞の分布について」, 『北海道言語文化研究』 第 11 号 (北海道言語研究会), pp.77-98.
- 藤田健 (2016) 「フランス語とイタリア語における定冠詞の分布について」, 『北海道言語文化研究』 第 14 号 (北海道言語研究会), pp.21-43.

引用テキスト

Arturo Pérez-Reverte (2002) *El Capitán Alatriste*, Santillana Ediciones Generales, Madrid.

Arturo Pérez-Reverte (2006) *Capitano Alatriste*, Traduzione di Roberta Bovaia, Marco Tropea Editore, Milano.

Italo Calvino (1993) *Il barone rampante*, Arnoldo Mondadori Editore, Milano.

Italo Calvino (1998) *El barón rampante*, Traducción de Esther Benítez, Ediciones Siruela, Madrid.

執筆者紹介

所属：北海道大学大学院文学研究科西洋言語学講座

E-mail：fujitat@let.hokudai.ac.jp

専門分野：統語論、ロマンス語学

